様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９５３

研究課題名（和文）北欧におけるホロコーストの記憶の変容

研究課題名（英文）Memory of Holocaust in Norway and Denmark

研究代表者
池上　佳助（Ikegami, Keisuke）

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３０７２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　ドイツ占領期におけるノルウェーとデンマークのユダヤ人の迫害体験と戦後の両国におけるホロコーストの記憶の変容について調査・研究を行った。
　戦後ノルウェー人は自らをナチスの被害者と位置付けていたが、占領期のユダヤ人の逮捕やアウシュヴィッツへの強制移送にノルウェー人の警察官、監視員などが自発的に関与していた事実を明らかにし、ノルウェー人の加害性を考察した。戦後のデンマークではユダヤ人救出の成功物語が「国民神話」として語り継がれてきたが、スウェーデンに脱出できずにテレージエンシュタット収容所に強制移送されたユダヤ人の体験を調査し、デンマーク占領期のユダヤ人問題を再評価した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the holocaust history in Norway and Denmark during the German occupation and the Norwegian and Danish memory of holocaust in the post-war era, Most Norwegian has identified themselves as the victims of the Nazi in the postwar period. My reserch turned out that a lot of Norwegian people like police officers or camp watchmen etc., participated in the actions to the arrest and deportation of Jews. That is to say,in the holocaust memory in Norway Norwegian perpetrators have appeared. In Denmark "the national myth" on the successful rescue of Danish Jews in 1943 has been predominant in the post-war era. My reserch on Danish Jews who were deported to Theresienstadt had a review of the heroic memory of the rescue.

研究分野：北欧現代史

キーワード：ホロコースト　記憶研究　北欧現代史　ナチズム　第二次世界大戦史

１．研究開始当初の背景

（１）本研究計画を申請した 2015 年は戦後 70 周年にあたり、戦争体験者の不在が間近に迫り、戦争の記憶をいかに継承していくのかという危機意識が広く認識されるようになってきた。今後、戦争の語り部は戦争体験者から未体験者へと移行せざるを得ないが、そうした語り部の交代が戦争の記憶にどのような変容をもたらすのか、戦争のいかなる記憶が選別・想起されるのか、これまで忘却・隠蔽されてきた記憶、とりわけ戦争加害の記憶がどのように再生されるのかが注目されるようになってきた。

（２）本研究対象の北欧のデンマーク／ノルウェーは 1940 年にドイツ軍の侵攻を受け、戦争終結の 1945 年までドイツの占領下に置かれた。戦後長らくデンマーク／ノルウェー国民は自らをナチスの被害者と位置付けてきたが、戦後 50 年にあたる 1980 年代後半ごろから歴史学界では占領期研究の見直しが進められてきた。その中で対ドイツ協力者の問題、つまり被占領地国民の加害の側面が掘り起こされ、「戦争の被害者でありながら、加害者でもありえた」とする新たな視点が提示されてきた。

２．研究の目的

（１）近年のホロコースト史研究の特徴として、研究対象地域（空間軸）の周辺部への拡大と分析対象時期（時間軸）の延長、ホロコーストを戦時中の事象と限定せず戦前・戦後までを射程に入れた連鎖的事象と捉える見方が広がってきている。

（２）本研究は上述の研究動向を踏まえ、従来ホロコーストの空白地帯と見なされてきた北欧、とりわけデンマーク／ノルウェーを研究対象とし、そこでのホロコーストの記憶が戦後どのように想起・忘却され、冷戦終結後の歴史認識の見直しの中でその記憶がどのように変容してきたのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

（１）まず、デンマーク／ノルウェーのユダヤ人が被占領期（1940‐1945）にどのような迫害を体験したのか、そうした迫害に非ユダヤ系の国民がどのように反応あるいは関与していたのかをユダヤ人の証言記録や回想録、秘密国家警察文書、収容所記録、戦犯裁判記録などの公文書等を利用し、実証的な研究を目指した。このためデンマーク／ノルウェーの国立公文書館、ユダヤ博物館、ホロコースト研究センターなどで史料調査を実施した。

（２）上記調査と並行して、デンマーク／ノルウェーのユダヤ人が逮捕・強制移送された「記憶の場」（デンマーク関連ではホーセレズ通過収容所、テレージエンシュタット強制収容所など、ノルウェー関連ではベルグ通過収容所、アウシュヴィッツ及びブーヘンヴァルト強制収容所など）を訪ね、ユダヤ人が辿った行程を追体験し、関連の文献資料を収集した。また、デンマーク／ノルウェーでの現地調査では、自国ユダヤ人に関するホロコーストの被害と加害の記憶が現在どのように表象されているのかをユダヤ人犠牲に関する記念碑や追悼行事、ホロコースト博物館の展示、ドキュメンタリーの映画やテレビ番組、新聞報道、歴史教科書などを調査し、さらにこうして新たに再生されたホロコーストに関する加害の記憶を次世代にどのように継承しようとしているのか現地研究者や学芸員より見解を聴取した。

４．研究成果

（１）<u>研究の総括</u>

①欧州の周辺部に位置し、約 600 万人といわれるユダヤ人犠牲全体から見れば、少数の犠牲に留まった北欧は、ホロコースト研究の空白地帯と見なされてきた。その点でデンマーク／ノルウェーの事例を考察した本研究はかなりの独自性を有し、ホロコースト被害の多様性、加害の複層性を例証することができたといえる。第二次世界大戦期の北欧・ユダヤ人問題に関する研究は我が国では初めてであるが、その成果を 3 本の研究論文に纏めて発表したところ、その中の拙論「ノルウェーにおけるホロコーストの記憶」が 2017 年の『史学雑誌‐回顧と展望』に「戦後ノルウェーにおけるユダヤ人迫害の記憶を論じることで、広く北欧全体におけるホロコーストの記憶研究に道を開く」と紹介された（369 頁）。また、各論文の抜刷りをある学術出版社に送付しコメントを求めたところ、非常に好意的な反応を得ることができ、右編集部との間で 2018 年度内に執筆予定の新論文 1 本を加えて、2019 年に図書として出版する計画で合意している。

②本研究の成果は、歴史研究の視点からいうならば、ホロコーストの特質が戦時という非日常的な時間のなかで、北欧を含む全欧州に及ぶ領域的な広さと、反ユダヤ主義やナチズムのイデオロギーとは距離を置く「普通の人びと」までもが関与・協力した加害の複層性にあったことを証明した点である。さらに記憶研究の観点に立てば、ホロコーストの記憶は被害者と加害者の二項対立の図式から再生するのではなく、被害者でありながら加害者でもありえた「灰色の領域」から再構成した「新たな記憶」の想起が必要との論点を提起したことである。この点は我が国における戦争の記憶の継承を考えるうえで大いに参照しうるものと考えている。

（２）<u>ノルウェー・ユダヤ人とホロコースト</u>

①1940 年から 45 年のドイツ占領期におけるユダヤ人迫害に関する最新の調査研究によれば、1942 年時点でノルウェー警察当局にユダヤ人登録されていたのは 1536 人で、そのうち 772 人が逮捕・強制移送され、戦後生還したのはわずか 34 人であった。また、ノルウェー国内で処刑されて死亡したのは 28 人で、636 人がスウェーデンなどに逃れ、約 100 人が解放時まで国内に潜伏していた。本研究では、2015 年に 91 歳で亡くなったアウシュヴィッツからの生還者で、国内最後の生存者であったスタインマンのホロコースト体験を同人の証言記録、テレビ番

組・新聞でのインタヴュー、ドキュメンタリー映画での語りを時系列的に辿りながら、公文書記録、他のユダヤ人生還者の証言や回想録などで裏付けていった。そこで明らかになったことは、アウシュヴィッツに至る前のノルウェー国内における対ユダヤ人措置、具体的にはユダヤ人の登録、財産没収、逮捕、通過収容所の監視、国外移送において、ドイツ占領当局とともにノルウェー人の官僚、警察官、監視員、鉄道員、タクシー運転手などが関与していた事実であった。しかも、そうした任務はドイツ占領当局の命令に忠実に従うだけの受け身的なものではなく、むしろ積極的な執行者としてのものであり、また、ユダヤ人情報の密告や国内移送における一般市民の「自発的」な協力があったことが判明した。その姿は、ドイツ占領下で抑圧され「被害」の側にいた、ナチズム信奉者ではない「普通の」ノルウェー人がキリスト者、警察官、収容所監視員あるいは国鉄職員の立場から、ユダヤ人の密告・拘束・移送などに自覚的に関与した加害者としての自画像であった。

②ドイツ占領期に関する戦後のノルウェー国民の認識は、祖国解放と自由回復のためにロンドン亡命政府と一体となってドイツに立ち向かい、忍耐と犠牲を払いながら最後に勝利を収めたとする「愛国と不屈の精神の物語」からなる「レジスタンス神話」が主流であった。そこに想起される占領期の記憶は支配者と被支配者、加害と被害という二項対立の枠組みのなかで、自らをドイツ占領による被害者として位置づけ、最後は勝利へと結晶化させる成功物語として表象化されたものであった。

③かかる占領期の記憶の中で、ノルウェー・ユダヤ人のホロコーストはどのように位置づけられていたのであろうか。1942 年にユダヤ人の約半数が逮捕され、アウシュヴィッツに強制移送された後、ガス殺されたという受難の史実そのものは知られていたが、戦後広く共有されたユダヤ人に関する国民の記憶は、被占領下にあった自らと迫害を受けたユダヤ人を同列に置き、ともにドイツの抑圧による被害者と見なすものであった。ところが 1990 年代以降、戦後史の再検討が進むなかで、ホロコーストの記憶を凍結し沈黙していたスタインマンら生還者たちが積極的に証言するようになり、これまで隠蔽されてきた「普通の」ノルウェー人によるホロコーストへの加担、つまりノルウェーの加害性が焦点化されるようになった。この結果、「被害のなかの加害」を踏まえた占領史の見直し、ホロコースト史の掘り起こしが進められた。その作業はまさに「愛国主義的な語りから普遍的な語りへのパラダイム・シフト」であり、「レジスタンス神話」からの脱却を意味した。

（3）<u>デンマーク・ユダヤ人とホロコースト</u>

①1940 年当時、デンマークには全人口の 0.2%にあたる約 6500 人のユダヤ人が暮らしていたが、その内 90%を越えるユダヤ人が戦後まで生き延びることができた。その生存率の高さはドイツ占領地では例外的なものであった。1943 年 10 月、デンマークのドイツ占領当局はユダヤ人の一斉逮捕を命じたが、レジスタンス・グループ、教会関係者、一般市民などがユダヤ人の救出に乗り出し、非ユダヤ系の親族を含む 7000 人以上を隣国の中立国スウェーデンへ脱出させた。戦後のデンマークにおいてこのユダヤ人救出の物語は “Oktober’43”と表象され、その成功談が占領期のレジスタンス活動と結び付けられ、いわば「国民神話」となって広く語り継がれてきた。本研究では、この国民神話から抜け落ち、これまで余り注目されてこなかったユダヤ人少数派のホロコースト体験を取り上げた。同じユダヤ人逮捕命令の際、実は約 470 人がスウェーデンに脱出できず、ドイツ保安警察に逮捕されて、プラハ郊外のテレージエンシュタット強制収容所に移送されていた。研究ではテレージエンシュタットへの移送から帰還までの体験を証言記録、日記、回想録、デンマーク及びドイツの公文書史料に基づいて考察した。

②最終的には、テレージエンシュタットに移送されたデンマーク・ユダヤ人の約 90%は戦後再び生還することができた。その要因としては、第一に占領下のデンマークはドイツから「モデル保護国」と位置付けられ、内政不干渉を約されていたことから、テレージエンシュタットに移送された自国ユダヤ人への「特別な処遇」を強く申し入れ、このためデンマーク・ユダヤ人はアウシュヴィッツなどへの再移送を免れ、さらにデンマーク赤十字を通じた食料・衣料の受け取りが許されていたこと、第二にテレージエンシュタット収容所はユダヤ人を絶滅収容所に再移送するため一時的に抑留させる「通過収容所」の機能に加え、「モデル収容所」としての対外的なプロパガンダ機能を有しており、デンマーク・ユダヤ人はその中心的な役割を担わされていたことである。いわばデンマーク・ユダヤ人は例外的な「特権」を享受していたことで「絶滅」を免れることができたが、同時に他地域出身のユダヤ人からの羨望と嫉妬の的となった。研究の成果としては、強制収容所内のユダヤ人の間にも生き残りをかけた確執や葛藤があり、従来いわれてきたナチスの指令に「子羊のように」従い、死を受け入れたとするユダヤ人像とは異なる姿、つまりユダヤ人犠牲の多様性を明らかにしたことが指摘できる。

③戦後のデンマーク国民が語り継いできた「ユダヤ人救出」の物語は、ユダヤ人を支援したデンマーク国民が主体者となっており、ユダヤ人はあくまで客体者にすぎなかった。このためデンマーク占領期の記憶には、ユダヤ人が脱出後のスウェーデンでどのような生活を送り、あるいは移送後のユダヤ人がテレージエンシュタットで何を体験し、さらには生還後のユダヤ人がデンマーク社会にどのように復帰したのかという視点が欠落していた。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

① 池上佳助「テレージエンシュタット強制収容所のデンマーク・ユダヤ人」『北欧史研究』査読有　第 35 号　2018 年（現在校正中）。

② 池上佳助「ノルウェーの中のホロコースト‐ドイツ占領下の統治機構とユダヤ人」『東海大学紀要文学部』査読有　第 107 輯　2017 年　1－14 頁。

③ 池上佳助「ノルウェーにおけるホロコーストの記憶」『東海大学紀要文学部』査読有　第 105 輯　2016 年　61－75 頁。

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　1　件）

① 池上佳助「第二次世界大戦とノルウェー‐レジスタンス神話の終焉」『北欧文化事典』丸善出版　2017 年　244‐245 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

池上　佳助（Ikegami Keisuke）
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：40307294

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

（　　）